

# ペンス副大統領の登壇で盛り上がった「サテライト2019」

神谷 直亮

毎年3月に開催されてきた「サテライト会議・展示会」が、今年は5月6日から9日まで4日間にわたりワシントンD.C.のウオルター E. コンベンション・センターで開催された。主催したアクセス・インテリジェント・サテライト・グループからは、2か月も遅らせた理由の説明はなかったが、結果として参加者が世界100カ国から15,500人に増えた。

第38回を迎えた今年のプログラムは、特別講演が1回、基調講演が1回、大小交えたセッションが72回という構成で、講演が減りセッションが大きく膨らんだ。

今回の最大のハイライトは、言うまでもなくマイク・ペンス副大統領による特別講演であった。会期初日の昼食会の際に登壇したペンス副大統領は、トランプ政権における経済政策と宇宙産業育成策について30分間にわたり論じた。

まず、「トランプ政権は、2年半の間に580万人の雇用を生み出してきたが、これには宇宙・衛星を含めた高度な技術産業の貢献が大である。アメリカに繁栄をもたらしているのは、我が国に根差す高度技術産業と言って良い。トランプ政権は、これからも月への再上陸の実現やペンタゴンに宇宙部隊を創設するなど、宇宙産業を広範囲にサポートする」と述べた後「宇宙や衛星ビジネスでアメリカがグローバルなリーダーシップを取れているのは、ここに集って

いる皆さんを含めた業界関係者の尽力による」と会場を盛り上げて拍手を浴びた。

次いで、「現在進行中のGEO（静止衛星）からLEO（低軌道周回衛星）への大きなマーケットシフトの段階で、アメリカの民間企業が衛星と打ち上げサービスの両面で応分の役割を果たすことが非常に重要だ。ホワイトハウスは、この支援策としてライセンスの付与、規制緩和、運用などの面で、不必要なものを極力取り除きストリームライン化を図っている。また、政府機関と民間企業との間で必要なデータシェアリングを促進する環境を整えつつある。特に、衛星の打ち上げ時や軌道上での衛星への衝突を防止するという安全面から米軍が保有するデブリ（宇宙ゴミ）のデータと民間企業が取得するデータをシェアする必要性が生じており、これが現時点で最も重要と考えている」と具体的な課題と政策を指摘した。最後に「トランプ政権は、宇宙戦に備えた宇宙部隊を近いうちに現実なものにする。GPSの運用とサービスで引き続きリーダーシップを維持する。5Gレースでもアメリカは必ず勝つ」と力説して締めくくった。

基調講演者は、珍しく衛星通信・衛星放送のユーザーを代表するA.P.モラー・マースク社のKlaus Bruun-Egeberg モビリティ&コネクティビティ担当部長で、船舶のフリート・マネージメントと最新の技術動向について語った。同社は、デンマーク・

コペンハーゲンに本拠を置く海運コングロマリットとして知られ客船やコンテナ船で世界130カ国をカバーしているという。このような背景から喫緊の課題として取り上げたのは、グローバルなコネクテッド・オペレーション、クルーのインターネットを含む福祉サービス、アセットのスマート管理で「衛星が重要なインフラを提供している」と述べた。

なお、筆者が知る限り基調講演者は、これまでNASA（米航空宇宙局）やFCC（連邦通信委員会）の関係者と、衛星メーカー、打ち上げサービス事業者、衛星通信機器メーカーのトップが担っており、ユーザーが基調講演を行うのは今回が初めてである。

特別講演、基調講演以外で今回目立ったのは、女性のみ8人によるセッションとスタートアップ企業に注目した「Unveiled Theater（初公開シアター）」の設置だ。

38年間にわたるサテライト会議史上初めてとなる女性パワー満載のセッションは、会期3日目の朝に開催された。「航空宇宙業界における女性の機能強化と多様性の育成」と題したセッションに登壇したのは、インマルサット、ボール・エアロスペース、ABS グローバル、ステラー・ソリューションなど、航空・宇宙・衛星関連業界や団体を代表する女性幹部である。登壇者は、「各企業に従事する女性のボイスやワークフォースが、クリエイティブな課題解決やイノベーションに貢献している。女性の力をフルに活用する多様性に則ったチームワークは、成功へのカギである」と異口同音に唱えていた。具体的な事例としては「インマルサットでは、当初3%にしか過ぎなかった女性の電機通信技術者が、現在11%にまで増え、業績に多大な貢献をする貴重な資産になっている」といった点が挙げられた。

スタートアップ企業重視の企画は、「CES」「NABショー」「IBC」などの大規



写真1 特別講演には、マイク・ペンス副大統領が登壇して脚光を浴びた。



写真2 基調講演には、A.P.モラー・マースク社のKlaus Bruun-Egeberg モビリティ&コネクティビティ担当部長が登壇した。



写真3 サテライト会議史上初めてとなる女性8人によるセッションが開催され関心を呼んだ。

模なコンベンションでは当たり前のようになっているが、サテライト会議が本格的に打ち出したのは今年が初めてだ。今回のプログラムで登場したのは、「スタートアップ・スペース・アントルブルヌール(宇宙起業家)ピッチ」「サテライト・スタートアップ・ワークショップ・ピッチ」「サテライト 101プログラム」の3つで、熱のこもったプレゼンテーションやセッションが展開されていた。

最後に、衛星通信・衛星放送業界のビッグ5が登壇する恒例の「グローバル・サテライト・オペレータ、今、将来を語る」に触れたいと思う。今回のこの目玉セッションで目新しかったのは、通常の司会者の他に、3人の女性質問者が加わっていた。

ビッグ5の登壇者は、ユーテルサット社のルドルフ・ベルマーCEO、SES社のスティーブ・コーラーCEO、バイアサット社のマーク・ダークバーグCEO、テレサット・カナダ社のダニエル・ゴールドバーグCEO、インテルサット社のステファン・スベングラーCEOで、昨年と変わりがなかった。女性の質問者は、航空会社(Southwest Airlines)、通信事業者(Sprint)、IoTシステム開発事業者(Sigfox)の代表でそれぞれ得意の観点からの質問を発していた。

ベルマーCEOは、「OTTによるビデオサービスの影響が少ない地域を中心に衛星による放送サービスを展開する戦略を取り、業績の60%を維持している。HD化、ウルトラHDサービスにも力を入れており年率2%増を達成した。LEOについては、次のベストソリューションということで鋭意取り組んでいる」と述べ、SigfoxをパートナーにしたLEO IoTビジネスに期待を表明した。

コーラーCEOは、「ビデオマーケットの業績を全体の3分1に保ちながら、政府機関や大企業のデータビジネスの拡大に注力している。エコシステムの構築に時間がかかっているが、クラウドを活用する衛星データネットワークを主力にして業績拡大を狙う」と語った。

ダークバーグCEOは、「バイアサットのメインビジネスは、一般消費者向けのブロードバンドサービスで、今も将来も変わらない。ビジネスモデルを創る上での難しさを感じているのは、ビジネスジェットや旅客機の顧客向けインターネットサービスである。特に複数の航空会社のたくさんの顧客に同時にサービスを効率的に提供するには、どのようにしたら良いか頭を悩ませている」と、実際4月の初めに開催されるNABショーの際のラスベガス空港で発生し



写真4 世界のビッグ5のセッションには、5社のCEOに加えて3人の女性質問者が初めて登壇した。

た異常事態を取り上げて将来の問題を提起した。

ゴールドバーグCEOは、「テレサットとしては、将来の成長案件としてLEOビジネスを積極的に進めている。政府機関、通信事業者向けのバックホールサービス、航空会社向けのIFC(In-Flight-Connectivity)、マリタイムサービスなど、あらゆる分野がLEOによるブロードバンドサービスを必要としている」とLEOへの大きな戦略転換を力説した。

スベングラーCEOは、「2つの基本方針を立てている。1つは、EPIC衛星によるきめの細かいグローバルなブロードバンドサービスの拡大。もう1つは、ハードウェアセントリックなビジネスからソフトウェアセントリックなビジネスへの転換である」と述べ、衛星通信・衛星放送分野におけるソフトウェア重視の戦術を鮮明にした。

スプリントを代表する質問者から5Gに関連した対応策を聞かれたが、5社とも明確な戦略の表明を控えていた。衛星による伝送には致命的な遅れの問題があり、高速を誇る5Gに対応するには、成層圏プラットフォームのような低遅延システムを検討する必要があるように思われた。

**Naokira Kamiya**  
衛星システム総研 代表  
メディア・ジャーナリスト